

## 西表の米作り

伊良波 剛

### 1 人口 竹富町

- (1) 総人口 3,661人(2002年5月)
- (2) 世帯数 1,810戸(同上)
- (3) 農家数 420戸(専業農家/209戸-2001年-)  
(兼業農家/211戸-同上-)

—2000年世界農業センサス—

- (4) 年齢・・・米作人口は、高齢化の傾向にあり、平均年齢は50歳前後である。
- (5) 平均生産量・・・1期作/400~450kg/反収  
2期作/300~350kg/反収

### 2 完全無農薬米の栽培

ヤマネコ印、西表安心米・完全無農薬栽培で知られる那奈伊孫一さん(西表安心米組合09808-5-6302)。自然の恵みに感謝し、自然と人間が共生することを敬う彼の姿に深く感動する。

### 3 あいがも農法

あいがも農法で知られる那良伊孫一さん。あいがもとは、かもとあひるのあいのこのことである。あいがもによる米作を始めたのが1992年前後で、現在、500~700匹のあいがもを所有している(1期250匹×2回 2期200匹)。

かものひなを確実にかえすために、孵卵器も取り入れた。ひなの購入に、1匹につき480円から520円ほどかかるという。イリオモテヤマネコによる被害を考慮して、あらかじめ多めに購入しておくそうだ。あいがも農法の特徴として、あいがもに雑草や害虫を食べさせることにより、そのふんをもって土を豊かにし、稲の生長を助けるというのがあげられる。農薬(除草剤や殺菌剤)、それに加え、化学肥料の役割までもが、あいがもの自然の摂理によって補われているのがわかる。

そこには、何の害もない。しかし、実際、あいがも農法においては、多大な時間と労力が必要となる。だからといって、それに見合った収入が得られる保障がないものも事実である。

#### (1) 沖縄の気候条件と米作

沖縄は本土と比べ、大地熱が高い為、水の蒸発量も多い。

大地熱の比較 西表・・・最高78 本土・・・最高45

田おこしをする際にも、本土では1~3回耕せば十分なのに対して、沖縄では、最低でも6~7回、多い所では8~9回も耕さなければならない。また、沖縄は気候が暖かい分、あぜに生える雑草や田草をきちんと除草しなければいけない。米が生き続けるには、最低限でも13℃はないといけない。15~16℃で、米の生長は止まり、11℃まで気温が下がると米は死んでしまう。

こうした面では、沖縄の暖かい気候というのは非常に米作に適している部分がある。沖縄の米作は、完全無農薬米や超早場米といった希少価値を生かすと共に、日本最南端の地で収穫できる米というのを、他にアピールしていく必要がある。

## (2) 米作と米

米作に使用する水は、基本的に近くの川から引いてくる。西部には、浦内川、仲良川、クイラ川、そして東部には、後良川、前良川、仲間川というそれぞれの3つの大きな川が流れている。実際、これらの川からは水田に水を引いていない。一期作の場合、水に関しては何の問題もなく、十分に足りているのだが、2期作の場合は、水事情がかなり困難になってくるようだ。山に大きなダムを作れば、農業用水の確保は十分にできるのだが、その反面、西表の自然が失われてしまう。

## (3) 兼業農家について

那良伊さんは、西部に住んでいる。東部に比べ西部は比較的に開けた土地が少なく、牛を飼育したりさとうきびを栽培するにも条件の悪い位置になってしまう。

## (4) 米作とユイマール

昔は、近くの農家の人々が10人~20人集まって、順番にみんなの田んぼを協力して田植えしてまわり、お互いの絆をかけ回していくということが行われていたそう。しかし、農薬や機械化により、作業が効率的になった為、1人でも十分に仕事がこなせるようになり、次第にユイマールの精神というのが希薄になってきている。

## (5) 米作と豊年祭・年中行事

米中心の文化形態にある西表島において、人々は自然を神として敬っている。西表島における稲作関連の主な年中行事は次のとおりである。

- 2月(吉日)・・・種子取り
- 3月(吉日)・・・クシヨイ(田植え終了祝い)
- 4月27日・・・世願い祭
- 6月(吉日)・・・シコマヨイ(初穂むかえ)
- 7月25・26日・・・豊年祭
- 10月29~31日・・・節祭(国指定の無形文化財)

## 4 牛とマンゴーの兼業

### (1) 何故、兼業なのか?

以前は米作りをしていた津嘉山さんだが、一転して今現在は牛とマンゴーを兼業している。そのきっかけとして次の2つの事柄があげられる。

キロ単価を比較した際に、一番値段が安いのが米である。また、年齢の面からしても米作りは、より多くの労力を必要とし、実際、生計を立てていくには今のような兼業という形が一番適当であった。

沖縄の気候特色として台風がある。米やマンゴーなどの農作物は台風の被害を受けやすい。そこで、台風の被害をほとんど受けない、確実に収入を得ることのできる牛と兼業することにより、より安定した生活ができる。

## (2) 栽培している品種について

那良伊さんが作っている米は、タイコウという品種で、自ら台湾から取り寄せたものである。太い茎と豊かな稲穂からなる米は"とてもうまい"という評判だ。穂ぞろいが悪く、又、無農薬のために害虫などの被害も受けやすい。出荷する際に米粒が落ちやすく、不利な点も多いが、味は天下一品といえる米である。

西表においては、現在ほとんどの農家がチヨニシキという品種の米を作っており、タイコウを栽培している農家はすくない。

津嘉山さんに"もう一度米作りをやりようと思いませんか"と聞いて見た所、"田んぼをかしてくれ人がいればすぐにでもやりたい"といった様なことをおっしゃっていた。作る米は無農薬に限るともおっしゃった。

## (3) そこで兼業に見る関連

無農薬農法によって栽培した米を、牛の良質なエサとして使用する。その牛が出したふんは栄養価が高く、それをマンゴーの肥料として使用することにより、マンゴーの質もよくなる。

こうして、一見別々に思える米と牛とマンゴーとに関連性が見えてくる。

## (4) 崎原長洋さんを訪問して

機械の種類 値段について

コンバイン(二じょうがり用) 240万円

田植え機(五じょうがり用) 160万円

かんそう機 108万円

トラクター

種まき機

その他(細かい用具)

機械の値段について全く知識がなかった為この額を聞いて高値さに驚いた。

1996 年度琉球大学教育学部社会科調査報告集

米作に使う農薬 化学肥料

八重山農協からの依頼もあって、最低限の農薬ということで、低農薬を使用している

### 【農薬】

ア 除草剤(ウルフ) 田おこし 田植え~収穫までを1サイクルとして、その間に1回だけ使用する。

イ 殺菌剤 かめ虫などが多発する収穫前に使用することが多く、最低1回の使用で、後は害虫が発生するその都度に使用する。

ウ 化学肥料 今現在では、田植えをすると同時に田んぼに化学肥料を注ぐことが

できる田植え機があり、それを使用している。又、化学肥料の使用量については、1つの田んぼにつき50キロ程度である。あとは稲の発育具合を見ながら、その都度、いれていく。

#### (5) 兼業について

現代では、米1本でやっていくのは難しい。沖縄には台風が毎年のようにやってくる。そこで崎原さん自身、米以外にさとうきび、牛なども兼業しているようだ。

それぞれの収入の入ってくる時期！

米 7月～8月

牛 せりが行われる都度

さとうきび 2月～3月

栽培している米の種類

ほとんどチヨニシキ 自分たちが必要な分ハトモチゴメも作っている。

無農薬米について

確かに無農薬にこしたことはない。無農薬米のほうが単価的にも高い。しかし、無農薬ともなるとはんてい米(黒い米)の量も増えてしまい、見かけ的にも悪く、商品価値も落ちてしまう。それと、除草剤や殺虫剤などを使用しないと、多大な時間を費やしてしまい、その反面、見れる田んぼの面積も限られ、収穫できる米の量も、それに見合った量にしかない。生計を立てていく上で無農薬米を作っていくのは、困難なことである。

東部と西部の地理的差異に関連して

西部に比べ東部は山が近くにある為、一期作は問題はないにしても、二期作あたりには山から吹きおろしてくる北風(季節風)によって、稲が全部落ちてしまう。

収入のほとんどは、一期作によるもので、二期作のほとんどは、次期の種もみ用である。

1996年度琉球大学教育学部社会科調査報告書 PP.23-26 をベースに若干の加筆修正をした。